

# 関釜裁判ニュース

2004年6月6日

第45号

釜山「従軍慰安婦」  
女子勤労挺身隊  
公式謝罪等請求事件

戦後責任を問う  
関釜裁判を支援する会

関釜裁判とは、一九九二年一月、韓国釜山市などの元日本軍「慰安婦」と元女子勤労挺身隊の十人が、山口地裁下関支部に、日本国の公式謝罪と賠償を求めて提起した裁判である。九八年四月、「慰安婦」原告の一部勝訴判決がでた。しかし、広島高裁で、二〇〇一年三月、「慰安婦」原告逆転敗訴、挺身隊原告の請求は全面棄却。二〇〇三年三月、最高裁で上告棄却。

## 被害者の声を直接聴いて下さい！

～フィリピンの日本軍性暴力被害者 福岡へ

花房恵美子

### 福岡裁判不当判決

五月二十四日、福岡高裁で中国人強制労働事件福岡訴訟の控訴審判決を傍聴しました。

「原告らの来日は強制連行であり、労働は強制労働である」「国及び会社は共同不法行為責任を負う」と事実認定し、国と企業の責任を全面的に認め、「国の主張する国家無答責の法理は適用されない」と国側の主張を崩しながら、除斥と時効により原告たちに思いもかけない逆転敗訴を言い渡しました。裁判官たちは勇気のなさと彼等が保身に走ったことを満天下に見せつけまし

た。原告たちはどんなに悔しかったことでしょう。

関釜裁判もそうでしたが、地裁段階で勝訴判決がいくつか出てきていても、高裁の壁に阻まれていました。高裁で初めて勝てる可能性のある裁判として、一番で企業に勝訴したこの福岡訴訟は国内外から高い期待を集めていました。最強の弁護団を擁し、弁論では国と企業を圧倒していたこの裁判ですら勝てなかったことに、裁判官たちの背中を押す世論を作り得ていないわたしたちの責任を痛切に感じました。

### 戦後六十年に向けての取組み

九〇年代初めに提訴した戦後補償裁判の支援運動は、裁判自体は終わって近々沈滞気味でした。遅れて提訴した中国人強制労働裁判や名古屋・三菱訴訟に励まされ、来年の戦後六十年という大きな節目の年を目前にし、企業ネットを中心とする戦後六十年キャンペーン（第一段として五月二十一日に三百人余りで国会請願・企業要請一日行動）、国連・ILOへの取組み、国際連帯集会、立法運動等活性化しています。

わたしたちも昨年四月の不二越第二次訴訟の提訴と昨年暮れの「早よつくろう！慰安婦」問題解決法ネット・ふくおか」の発足で、被害者が生きておられる最後の機会に日本政府による謝罪と賠償への道筋をつけたいとねじを巻き直しました。

## 国会では

先号の関釜裁判ニュースに一部ご紹介しました。三月一日、藤田一枝議員が衆議院予算委員会、三月十八日、神本美恵子議員が参議院内閣委員会、五月十七日、榑崎欣弥議員が衆議院決算行政監視委員会で「戦時性的強制被害者」問題でそれぞれ三十分質問されました。

藤田さんは国民基金に絞って質問され、明快な論旨で基金の破綻を明らかにされました。神本さんは頻発する現在の人権侵害と差別に対し、人権教育のための国連十年とはなんだったのか疑問を呈され、「慰安婦」問題への取組みを通して人権教育を豊かなものにしてきたい旨を述べられました。榑崎さんはこの問題は過去の清算であるとともに、未来を切り開く国家安全保障に関わる問題として、大局的な視点から具体的に質問していただき、内閣官房に戦後処理対策室的な機関の設置を提案していただきました（詳しくは両院のHDPの議事録を見て下さい）。

今回の三人の福岡出身議員の国会質問はわたしたちを勇気付け、他の国会議員にも

刺激を与え、年金問題で空転している国会で日本の政治家の国際的な良心を示されました。民主党内では議論を深化させるために若手国会議員を対象に連続した勉強会が企画され、すでに二度開かれたそうです。与野党を問わず議員に直接会い、被害者の思い・国際社会の動向・裁判も含めた経過と現状を訴えることは大事で、今後もしっかり組んで行きたいと思っています。

「戦時性的強制被害者問題の解決の促進に関する法律案」は現時点ではまだ上程されていませんが、同じく三月十八日に参議院で質問された岡崎トミ子議員を中心に近日中に上程の準備がなされています。この法案の成立に向けて一歩でも二歩でも前進させたいと願っています。

## 被害者の声を聴こう

六月二日と七日に中国人元「慰安婦」裁判の控訴審があり、原告本人尋問と、証人尋問が行われます。それにあわせてフィリピンから日本軍「慰安婦」被害者二人と支援団体リラ・ピリピーナのスタッフと通訳、計四人が来日されます。

昨年十二月最高裁で上告を棄却され、司

法による解決が閉ざされる中で、日本政府に抗議し、中国の被害者と合同で院内集会に臨み、心ある国会議員と市民に訴えるために来日されます（院内集会は六月三日、「被害女性に希望を！補償立法の成立をめぐって」と題して、下関判決を生かす会主催で行われます）。

そのフィリピンの被害者を福岡にお呼びすることにしました。被害者に向き合い、その訴えを聴くという原点に戻り、被害者の願いをともに実現するために何をしていくのか考える集会にしたいと思います。皆様のご参加をお待ちします。

(福岡) 戦時性暴力をなくすために

—口をたちのお話を聞く集い—

フィリピンにおける日本軍性暴力被害とは

日時 2004年6月14日 午後6時30分から8時30分

場所 ふくふくプラザ5F 視聴覚室 (TEL 092-731-8100)

参加費 800円 学生500円

主催 早よつくろう! 「慰安婦」問題解決法ネット・ふくお

共催 戦後責任を問う・関釜裁判を支援する会

「従軍慰安婦」問題と取り組む九州キリスト者の会

「戦争と女性への暴力」ネットワーク・ふくお

## 原告を訪ねて(その1)

松岡澄子

昨年の六月十四日(裁判の最終結果の報告のために、天安(チヨナン)近くの温陽温泉(オニヤンオンチヨン)に、原告、支援者二十三人が集まった)以来の訪韓でした。

花房夫妻が、五月一日、釜山で知人の結婚式で主礼(牧師と仲人を兼ねた役)の重責を仰せつかった機会にあわせるスケジュールでした。参加者は花房夫妻、緒方貴穂さん、井上由美さんと私の五人。日程も手前もさまざまで、連休中の海外渡航組のカウントになりました。私も連休中なればこそその参加で多忙な仕事と携帯電話からの解放の時でもありました。

### ◆5月1日 釜山

釜山港に柳丁(ユ・丁)さん、朴SU(パク・SU)さん、姜YO(カン・YO)さん、李YO(イ・YO)さんと共に馬山在住の秋月康夫さんと、先に釜山入りしていた緒方さんが私たち二人(松岡、井上)を出迎えてくれて、釜山の海水

浴場である海雲台(ヘウンデ)のコンドミニアムに行きました。結婚式の大役を果たした花房さんも合流し、今回の旅がスタートしました。素敵な海岸を散歩したのは元気な柳丁さんのみで李YOさんは風邪のため大きなマスクを、朴SUさんは睡眠薬の副作用で足がふらついて転倒し、打撲した腕にサロンパスを貼っていました。姜YOさんはソウルのお兄さんがガンの末期で早朝見舞いに行くのでと夕刻帰宅されました。

### ◆5月2日 光州

元気な柳丁さんも急遽同行することになり高速バスで光州に向かいました。来日の際李金珠(イ・クムジュ)さんたちはいつも約四時間の道のりを通われたことに高齢なので大変だったろうと感じました。

バスターミナルに三人が迎えにきてくださり李金珠さんの家へ。広島で風邪をひかれた後、咳がまだ治らず長くつらい様子に心痛む思いでしたが、李金珠さんの「メディアを通して知らせる」という使命、執念の健在さに安堵もしました。インターネット新聞で配信しているオーマイニュースの

記者から私たちは取材を受けました。梁錦徳(ヤン・クムドク)さんはデイサービス(?)に毎日通っているとお元気でした。不二越裁判の第四回口頭弁論で意見陳述する成S(ソン・S)さんと打ち合わせをしましたが、以前よりやつれた様子が気になりました。韓食堂でごちそうになった蚕のサナギの絶妙な食感も印象的でした。

### ◆5月3日 ソウルから春川

金浦空港に迎えてくれた朴らO(パク・S O)さん、金丁(キム・丁)さん、羅H(ナ・H)さんと共に朴頭理(パク・トゥリ)さんのいるアニヤンメトロ病院へ地下鉄で行きました。

二月十日、体力、気力が弱ってヨンインの老人病院に自ら望んで入院したのですが冷えた足を温める足浴でやけど(皮膚感覚がないために温まらず熱いお湯を入れた)という信じがたい事故に遭い、三月四日ここに転院されました。

入室時おむつ交換かと錯覚したほどで、導尿していることもあってフラットの紙おむつを下に敷いてあるのみで下半身は素っ裸。口から食べていないのでしよう、鼻腔



朴頭理さん (5月3日アニヤンの病院で)

栄養のチューブと左胸の中心静脈栄養の点滴、両手は抑制のグローブ(薬の副作用の搔痒を搔かせないため)、両足は包帯でぐるぐる巻きの状態でした。

点滴を抜くなど医療事故につながるとして「抑制」が実施されている医療・福祉の現場から「抑制は人権問題」と指摘し抑制ゼロ作戦が展開され始めたのは日本でもほんの二、三年前のことです。尊厳を求めているあの朴頭理さんが抑制されているのを目の当たりにして老人福祉に携わっている私としては何ともやりきれない悲痛な思いに駆られました。立つ、歩くためにリハビリをする。リハビリのために皮膚移植は必須だけど、娘さんの同意が得られないよう

です。今回の発端は、古今東西を問わずにある親子の愛憎の結果として心痛みました。食べる楽しみもなくただひたすら抑制のまま、ベッド上で時間の経過に耐え続けなければならぬ朴頭理さん。尊厳とか人権はおろか基本的欲求すらも充足されていない現実。医療、福祉に対する理念、看護師、介護者の質と人数の問題、予算等、問題は大きく深刻だろうがこの原稿を書いている今もベッド上の朴頭理さんの痛々しい姿が脳裏を離れません。ナムムの家も医療と介護が複合した、専門療養院のニーズの高まりは必然と思います。

四人のハルモニと井上さんとアニヤンで別れ、四人で春川の金景錫(キム・ギョンスク)さんを見舞いました。サムスンとの会谈の二日前の二月四日、心臓の血管破裂で三本のバイパス人工血管をつけるという高度の手術をサムスン病院で受け、十八日間の意識不明の間から生還された金景錫さんは大分お元気になられていました。

不二越闘争、サムスン交渉 否、戦後責任、戦後補償運動にとって不可欠の闘士が、再び陣頭指揮をとってくださる日が近いこ

とを証してくれましたが、無理できないお身体であることも心配しています。

今年二月に成立した「日帝強占下強制動員被害真相糾明等に関する特別法」によって韓国には地平が開ける希望を抱けました。

### 原告を訪ねて (その2)

花房俊雄

◆5月4日 春川からソウル

春川から列車で二時間、ゆつたりと山あいの景色をたのしみながら清涼里(チョンニヤン)ニ 駅に到着した。

地下鉄に乗換え、ソウル市庁で降り、原告たちと待ち合わせているロッテホテルにむかう。待ち合わせの二時に昨年温陽温泉に行く時お世話になった金銀植(キム・ウンシク)君が来てくれたが、肝心の原告たちが現れない。いつもは約束の時間よりもはるか前に来て待っていてくれる原告の姿がどこにもない。いやな予感がする。朴SOさんの家に電話すると連れ合いさんが「韓江の南にあるロッテワールドホテルに行く



左から村SOさん、柳Tさん、金Jさん、羅Hさん

(5月4日 仁寺洞の食堂で)

と言っていた」とのこと。何ということだ。ソウルにはロッテホテルが二つあったのだ。そしてハルモにたちにとってロッテとは江南にあるロッテワールド以外になかったのだ。

今さらロッテワールドに行つてすれ違つ

たらと、待つこと二時間、村SOさん、金Jさん、羅Hさん、柳Tさんがようやく到着した。「朝十時にロッテに行つてずっと待っていたよ。三時過ぎててもこないで大変心配して春川の金会長に電話したらソウル市庁前のロッテホテルだと聞いてあわてて来たよ」と金Jさんがまくしたてる。羅Hさんが「よく待つていてくれてありがとう。会えないのではないかと心配していたよ」と嬉しそうにおっしゃる。なんとやさしい方だろう。

原告たちを待つ間、金銀植君とサムスン交渉について話を交わす。

「金景錫さんが回復次第、サムスンとの再交渉に乗り出します。金会長が病後で大変なので、私が助けながら頑張ります」と、力強く言われた。老齡の被害者たちを助け、共に闘う三十代の若者が登場している（このあと、五月二十七日に三十六人がサムスン本社に再度の交渉に行った。金景錫さんは、サムスン交渉で頑張つて、春川に帰り。その後、金銀植君がみんなを引き連れて不二越ソウル事務所に行き、交渉したとの連絡が五月二十八日に入った。詳しくは次回

のニュースで。

宿泊予定の仁寺洞（インサドン）の韓式旅館で、関釜裁判支援者の姜済淑（カン・ジエスク）さんと落ち合う。近くの食堂で田螺などの食材を使ったヘルシーな食事をした後、再び旅館に帰って原告たちと話し合う。羅Hさんに、「七月二十八日の第四口頭弁論に木浦の成Sさんと一緒に来て下さい」と、伝えると「私の経験した苦労は簡単には言えないよ。ぜひみんなに聴いて欲しい」と嬉しそうに言われた。

二年前、初めて会った時、暗くて寂しそうな印象が強く残った羅Hさんは、昨年四月提訴で日本に来て以降すごく前向きで明るくなつてきていて、わたしたちへの暖かい気遣いが印象的であった。金Jさんは離婚した後の子育ての苦労、そして今一緒に生活している息子のインテリアデザイン会社が倒産して苦しい生活に追われていて、「不二越から補償金を取って、少しでも息子を助けたい」と、勝てる展望が見えない裁判へのもどかしさを話される。

村SOさんはずいぶん耳が遠くなられた。七月の裁判に行けないと気落ちされていた。かつての気丈なSOさんが弱られているのが気がかりであった。

九時ごろ原告たちが帰り、早寝の柳下さんを宿に残して、姜済淑さんと近くの居酒屋に出かけた。その居酒屋には、三月に成立した「日帝強占下強制動員被害者真相糾明のための特別立法」の九月の委員会立ち上げに向けて市民運動の人たちが集まっていた。姜済淑さんが別室でのその集まりに参加され、抹茶を飲んでいた私たちの席に若い女性がにこにこ挨拶に来られた。一昨日、光州で別れた李金珠さんの孫娘のボナさんであった。

「何であなたがここにいるの?」と思いがけない出会いにびつくりする私たちに「姜済淑さんたちと一緒に委員会立ち上げの準備にソウルにきている。九月からソウルの委員会に入って、真相糾明の仕事を二年間する」とのこと。李金珠さんの自宅の二階に何度か泊めていただき、一階にすむ息子さん夫妻とお孫さんたちとは軽い挨拶を交わす程度。まさか孫娘が李金珠さんたちが奮闘して成立させた真相究明法案の実現者として後を継いでいるとは知らず、感動の出会いだった。

韓国の若者たちは多くの血を流しながら軍事独裁政権を倒し、光州蜂起犠牲者の

真相糾明と名誉回復、四・三 済洲島大弾圧事件の真相糾明と名誉回復を実現し、ついに日帝支配下の強制連行被害者の真相糾明・名誉回復にたどり着いた。

「慰安婦」問題こそ韓国の幅広い女性たちのサポートを得て展開されてきたが、他の強制連行被害者の戦後護補償運動は年若い被害者たちの孤立した戦いが続いていた。韓国の若者たちの民主化闘争はついに祖父母たちの戦いと合流を開始したので。ソウルの街は夜遅くまで若者たちの熱い運動が展開されていた。

#### ◆5月5日 ソウルへ帰国

朝、釜山に帰る柳下さんをソウル駅に送る。旧駅舎の左側に近代的な駅が新築されていた。旧駅舎の付近にたくさんのホームレスがたむろしている。「ああ、日本と同じだ」と感じる。柳下さんは別れ際「みんなと一緒に旅ができて楽しかったよ」とにこにこしていた。一番老齢であるにも関わらず早寝・早起き・早朝の散歩をかかさず、食生活にも人一倍気をつけているマイペースで自立している下さんの旅は実に楽しかった。

ソウル駅からの帰り、仁寺洞近くで五人一組の若者の部隊が次々と街に繰り出していくのに出くわした。先日おきた北朝鮮列車爆発事故に巻き込まれた小学校の子供たちの支援のカンパ活動を、ソウルの様々な街角で展開しているのだ。改めて韓国の若者たちの北朝鮮への支援・交流の活発さを目の当たりにして、日本で聞いていた「南北朝鮮の民間交流の流れはもはや誰にも止めることはできない」ということを実感した。

姜済淑さんに同行してもらい、昼前再度、安養(アニヤン)市のメトロ病院に朴頭理さんを訪ねる。一昨日の、表情が喪失していた朴頭理さんの姿が胸奥に焼き付いていて気がかりであった。朴頭理さんの姿は今日も痛ましかった。手首は、重りとして石が結わえられた紐でくくられ固定されていて、私たちの姿を見ても目の表情は相変わらず空ろで、そのうち眠そうに目が閉じられいつた。十年間の裁判闘争中、会えば実に嬉しそうな笑顔を浮かべ、別れる時はその辛さに「早く行け、早く行け」という手振りをしてながら涙を浮かべていた懐かしい朴頭

理さんの表情はもう戻ってこないの  
うか。後ろ髪を引かれながら病室を後に  
した。

昼食を済まして、地下鉄に乗ること約二  
十分、九老区開峰(ケボン)にいる李順徳  
(イ・スンドク)さんを訪れる。姜済淑さん  
が携帯電話で連絡をしていたので、三階の  
自宅の玄関前に杖を片手につき身を乗り出  
して私たちをとて嬉しそうに出迎えて下  
さった。部屋に入るとにこにことして「よ  
く来た。よく来た。昼飯を食べに行こう。  
近くの食堂に予約している」という。

「今食べてきたところでも食べられ  
ない」というと、「家に来て食べてくれるの  
を楽しみにしていたんだよ。絶対に食べな  
ければだめだよ」ととても聞き入れてくれ  
そうにない。十年前、本人尋問で福岡にこ  
られた時、民間基金構想を激しく批判した  
記者会見直後、李順徳さんは「おれが生き  
ているうちに賠償をして欲しい。金が出た  
らな、あなたたちを韓国に呼んでご馳走し  
てやりたいんだ」といわれたことが思い出  
される。いまだ賠償は実現していない。し  
かし家を訪れた私たちをもてなしたい思い  
が溢れている。かくして私たちは急遽近く



5月5日 李順徳さん(真中)の家で(ソウル)

の小高い山の手散歩に出かけ腹ごなしを  
して帰ると、李順徳さんの亡くなった連れ  
合いの先妻の娘、孫、娘の夫の母親総掛か  
りで食事の準備が始まっていた。食堂の予  
約は取り消し、手作りの料理に切り替えた  
のだ。

順徳さんは三畳ほどの自分の部屋に私  
たちを連れて行き、宝のようにしている写  
真を見せていただいた。まだ幼い先妻の娘  
と若かりし日の順徳さんの写真を見せられ  
てとても安心した。光州からソウルの義理  
の娘のところに移られてうまくいっている  
のか気がかりであった。写真からは実の親  
子のような雰囲気伝わってくる。

その娘さんを先頭に作られたご馳走は  
素晴らしかった。何種類もの手作りのキム  
チ、スープ、野菜料理、魚料理を堪能した。  
楽しい会話の中で時々、順徳さんは「まだ  
金はないのか？」と時々つぶやくように  
いわれる。「すいません。まだなんです」と  
なさけない答えを返す。話はあちこちに飛  
び交いながら瞬く間に訪れた夕方に家を辞  
した。いつまでも手を振って別れを惜しん  
でくれた順徳さんの顔が朴頭理さんの顔と  
共に胸に刻みこまれた。

胸がふさがされる痛みと暖かい交流の  
喜び、原告たちの残り少ない時間への焦燥  
とたゆみなく社会を切り開いていく若者の  
国・韓国への希望が交差する今回の旅は、戦  
後補償運動への思いを新たにするものだ  
った。

## 国際連帯協議会に参加して

緒方貴徳

五月十八日、国際連帯協議会ソウル大会に参加するために、ひとり韓国に渡った。二週間前にも訪れていたので、今月二度目の訪韓だった。最初の訪韓時、ハルモニたちの痩せ衰えた姿に接し、「時間の無さ」を改めて感じた。特に、朴頭理（パク・トゥリ）ハルモニの病床の姿に言葉を失った。裸同然の下半身、骨と皮だけの両足、ベッド脇に縛り付けられた両腕、鼻と腹部には点滴と導尿の管……。悔しくて仕方なかった。何かしなければと焦燥感に駆られ、二度目の訪韓を決意した。

二十日から二十二日にかけて、ソウル女性プラザを会場に協議会は開催された。正式名称は「日本の過去の清算を求める国際連帯協議会」。昨年九月の上海での創立大会に続く、第二回大会だった。戦後六十年を翌年に控え、過去清算運動の転

換点となる契機をつくり、激しさを増す日本の右傾化を阻止するために、七ヶ国・地域（南北朝鮮、中国、台湾、フィリピン、米国、日本）から、二百名以上が参加した。

二十日は歓迎晩餐会が主で、実質的な協議は二十一日から始まった。基調報告の後、被害者証言。郭貴勲（カク・キフン）さん（韓国人被爆者）、李相玉（リ・サンオク）さん（朝鮮人元「慰安婦」）、姜根福（カン・グンボク）さん（南京被害者）、アモニタ・バラヤディアさん（フィリピン人元「慰安婦」）……。壇上で泣き崩れる証言者、傍らに寄り添う支援者、それを取り囲む多数の報道陣……。

午後は、日本軍「慰安婦」、遺骨・調査、強制連行、集団虐殺、教科書問題というテーマごとに様々な視点から分析と報告がなされ、翌日の分科会で更に議論を深めた。

「慰安婦」分科会では、今後の具体的な行動について討論し、国際署名活動、世界同時デモ、各国議会や国連人権委員会への働きかけ、記念館建設、国際司法裁判所（ICJ）への提訴等が合意された。

概して実践的な内容で、戦後六十年に向け、何とか解決の道筋をつけようという熱気が会場にあふれていた。国際署名は来年七月に国連と日本政府に対して提出する予定で、今後各国で取り組まれることになる。世界同時デモは、国境を越えて連帯した六百回水曜デモの経験を生かし、各国にある日本の公共施設（大使館・領事館等）の前で行われることが決まった（日時は来年七月八月頃）。

ICJ 提訴に関しては、北朝鮮の並々ならぬ意気込みが感じられた。「わが国には、証拠と証人が充分整っている」。各国政府が提訴に踏み切るよう国内運動を展開することが提案された。

日本の国内運動としては、国会への働きかけや記念館の建設が課題だろう。

「慰安婦」裁判での敗訴が続く中、立法解決に向けて世論を喚起し、議員に協力を要請して行く必要がある。また、戦争の実相を記録・記憶し、次世代を教育する場として記念館の建設も推し進めなければならぬ。（現在、「私たちの戦争と平和資料館」建設に向け、募金活動中。）午後、声明文の発表。強制連行被害や



遺骨の調査と真相究明、靖国参拝・有事立法・イラク派兵などの軍国化の阻止、歴史教科書歪曲に対する闘い、賠償請求訴訟への支援、謝罪と賠償を伴った日朝国交正常化、日韓基本条約の改定運動等々、今後の取り組みが読み上げられ、第三回平壤大会（〇四年九月）、第四回東京大会（日時未定、〇四年十二月？）の開催が確認された。

閉会の挨拶に立った姜萬吉（カン・マンギル）さんは、日本人参加者に対し手厳しい言葉で締め括った。「今回日本から参加した方々は、日本の中でも良心的な勢力だと思えます。しかし、日本の良心勢力は飾りにしか過ぎない。皆さんは監獄に入れられたことがありますか？戦後六十年になろうというのに、未だ過去の清算をしていない日本は文明国とは言えない。皆さんのこれからの闘いに期待します。」

もう一人、金亨律（キム・ヒョンイル）さんも忘れることができない。「唯一の被爆国」という被害者意識に立った日本の平和主義は「嘘の平和主義」です。広島・長崎の被爆者の約一割（七万人）は

朝鮮半島出身者です。なぜ私の母は広島で被爆したのでしょうか……。社会的無関心の陰で被爆の後遺症に苦しみ続けている被爆二世の境遇を、瘦せた体で懸命に訴えかけていた。先天性免疫障害のため肺機能の七十%が失われ、残りの三十%で呼吸しているとのこと。自分と同世代で、想像もできないほど苛酷な人生を歩んでいる金亨律さん……。今後は、在外被爆者二世のことも課題としなければならぬ。

夜の歓送晩餐会は、とても和やかな雰囲気、各国それぞれ歌や踊りを披露した。

とりわけ「慰安婦」被害者の方々が嬉しそうに歌い踊る姿に、目頭が熱くなった。韓国の李容洙（イ・ヨンス）さんがマイクを手に歌い始めると、つられて他のハルモニたちも踊り出す。北朝鮮の李相玉さんは少し照れた様子で、フィリピンのアモニタさんも最高の笑顔をしている。今も続く心身の痛みと過去の壮絶な記憶からひとときでも自由になって欲しい……。そう願いながら、至福の時をしばし共にした。

宿への帰り道、朴頭理ハルモニのことを思い出しながら、自らに言い聞かせる。この協議会を単なるイベントで終わらせてはならないと。



5月22日歓送晩餐会的一幕（ソウル）

## 封印された過去

### 日本人慰安婦（後編）

平尾弘子

アンボンの滝の流れる近くに在った慰安所には、日本人の他、朝鮮人、中国人、タイ人の女性もいたが、この人は、日本人慰安婦の境遇にことのほか、同情を寄せていた。話の合間にもIさんは、何度か、

「政府もあんたがたも韓国人の慰安婦の支援ばかりしてなぜ、日本人のことをほっておくのか」と、激しい口調で言い募った。謝罪と補償を求めて名乗り出た日本人がいないからだと

と言つても、老人は聞こうとはしない。

思えば、戦後六十年も経ちながら被害者が名乗り出られないような状況が続くこの社会の在りかたとは何なのだろう。真相も責任も全てがうやむやのまま、国が膨大な資料を隠匿したままにしていること…近代日本の公娼制の問題点を共有することもなく、また、慰安婦は全て元々、売春に携っていたというような誤った認識が広く流

布されている状況を放置していること…これらが相まって、硬直した社会認識を变革できずにいるのだ。

そして、老人の話聞くうちに、なぜ彼がこれ程までに日本人慰安婦の問題にこだわるのか、理由が明らかになってくる。

一九四四年七月、スラバヤからアンボンに転属したIさんは、兵舎にいても寂しいから外出しないかと同僚に誘われ、慰安所に行つた。「うめまる」と名乗る十六か十七歳の日本人慰安婦が出てきた。どう見ても子どもにしか見えず、相手にしなかつたところ、あどけない顔の「うめまる」は、ふて腐れたように自分を抱けと迫つたという。この間の事情は、多分にIさんの脚色があるような気がする。

そうこうするうちに「うめまる」とけんかになり、騒ぎを聞きつけ、そこへ姉さん格の紅い友禅の着物を着た女が現れた。慰安所のような所では、こういつた騒ぎは日常茶飯事であつたらうから、手慣れた年長者が仲裁に入ることになつていたのである。

しかし、忽然と現れたこの女は、何を思

つたのか、彼にいきなり故郷の九州の言葉で話しかけてきた。

「兄さん、めずらしか、私やが」

逆上していた男は、事情が呑み込めず、

「お前に兄さんと言われる筋合いはなか」と怒鳴りつけたそうさ。女の方は、冷静で、

「七年も会わんから、わからんのやろう。『石原の手切れの娘』（文中仮名と言つたらわかるやろう）」

と平然と言ひ放つた。

その時、初めて眼前の紅い友禅の女が、親戚の娘、「まさこさん」であることに気づいたそうさ。「まさこさん」の父親が海南島に軍属で行つて、手を負傷したため、『手切れの石原』と通称されていた。無理もない。Iさんが入隊した時、この女性は、まだ幼い少女であり、それから七年近い月日が流れてきた。その間に彼女の身に起こつたことを考えれば、変貌ぶりもうかがえる筈だ。驚いたことにその慰安所には、「まさこさん」だけでなく、妹で当時十六歳位の「はるこさん」も連れてこられていた。姉妹で同じ慰安所に入つていたので。

「まさこさん」と「はるこさん」が、同郷のしかも親戚の娘でもあることから、I

さんは、慰安所の日本人慰安婦と急速に親しくなっていた。

人間の記憶というのは、ある部分、極めて鮮明に昨日のことに残影が凝集されていく。日本人慰安婦たちと親しくなったIさんは、ある時、将校が土産として慰安婦に与えた干し鯛二十匹をもらったそうだ。兵舎に戻ってから誰に何匹ずつ、分け与えたかを今も正確に覚えていた。

日本人慰安婦にまもなく、自分の所属部隊がセラムに移転すると告げると、女たちは、泣いて連れて逃げてくれ、日本に帰りたいとIさんに懇願した。しかし、七名もの女性を連れて見知らぬ南方の地のどこに逃げる場所があるだろうか。また、捕まっていた最初に憲兵に殺されるのは、自分でもある。日本に戻ることができるよう話をつけるからと、なんとか女性たちをなだめたという。

「うめまる」と名乗っていた幼い慰安婦は、歌を作っていた。

アンボンの港は 夜霧がふかい ふかい  
はずだよ 軍服濡らす

濡れた軍服は どなたが乾かす 立つや

かもめの三本マスト

その歌をもし、生きて日本に帰ることがあったなら、必ず覚えておいてくれと彼女は、Iさんに頼んだ。

結果として彼は、この日本人慰安婦たちの帰還に少なからず尽力することになる。

軍隊というのは、私たちが想像する以上に一人一人の兵士の来歴から行動まで全てを把握、管理していた。当時、七年兵の万年兵長であったIさんは、慰安婦の帰還に関する内容を含んだ指令と推測される四通の手紙を大阪出身の楠本副官から直々に公用証を付けて、慰安所へ届けるよう命令されている。

どういう経緯があったのか、慰安所には中将や憲兵隊の者が来ていた。四通目の手紙の文面に眼を通した憲兵は、それまでの態度を一変させ、伝令役に過ぎないIさんに「ありがとうございます」と敬礼したという。紙面の内容をIさんは、知らない。

多くの日本人慰安婦は、名目は看護婦として日本内地に帰っていたとIさんは、証言する。Iさんの所属していた第二大隊

も一九四四年八月四日にアンボンを出発し、セラム島に向っている。

しかし、戦局の悪化したアンボンの地から日本人慰安婦を本国に戻した後、日本軍は、先に言及したような更なる暴挙を重ねていった。

Iさん自身は、一九四六年六月十五日、インドネシアのスラバヤから和歌山に上陸し、帰還を果たした（戦記連隊略歴によれば、第二大隊は一九四六年六月十四日和歌山県田辺港帰着、復員完結と記）。

しかし、やっと故郷に戻ることができたというのに、そこには衝撃的な事実が待っていた。家に帰ってまず帰還の報告をするため、仏壇に手を合わせると、なんと妹の写真も仏壇に飾られてあった。驚いて母に問い質すと、妹の一人も看護婦の仕事と騙されて南方で慰安婦にされ、猫いらず（殺鼠剤）を飲んで自殺して果てたという。

骨も戻ってこなかった。老人は、この事実を思い出すと、未だに死んでも死に切れない思いにとらわれると語った。

実の妹を含めた犠牲者をいつたい誰が連れていって、誰が利権を得ていたのか、真

相を知りたいと願ひ、復員後、市役所の援護局などにも出向いてみたが、まったく相手にされなかつたそうだ。結局、Iさんの周辺で実の妹を含め、三人もの女性が、日本軍慰安婦制度の犠牲者となつてゐる。

この元兵士は、二回目の聞き取りの際も初年兵の時に受けた暴行やいじめの話を繰り返したが、ざわついたファミリーストランの一角で、急に太い濁声を押し殺して、周囲を訝るかのように指をそつと四本立ててみせた。私は、その意味をすぐには呑み込めなかつた。四つ立てた指は、「四つ足」、すなわち被差別部落を現す隠語を指していた。

初年兵に対するリンチは、日本軍の体質から派生し、恒常的に存在したものと考えられたが、Iさんが受けた暴力には、それを凌駕する理不尽さが隠されていた。

厚生係の兵士が指摘してわかつたことだが、Iさんの名簿には赤線が入つてゐることだった。赤線を持つ意味を厚生係の者も知つてか知らずか、Iさんには告げなかつた。

兄は、兵士として狩り出され、被差別部落出身であるが故に軍隊内で凄まじいリン

チや苛めに遭う。しかし、反面、日本軍の一兵卒として殺戮や強姦を中国やフィリピンの村々で平然と行ない、慰安所にも出入りする。一方、妹は、戦争・国家・貧困・部落・女性―幼い少女の身で担うには担いきれない様々な円環の連鎖の果てに性奴隷とされ、自ら命を絶つてしまつた。

把握しようとしても把握することのできない、戦争というものの、そして人間が編み出した差別構造というものの、混沌とした言語に絶する形相が浮かび上がってくる。

思えば、この眼前の老人も軍隊内や戦後の社会の中で、一定の地位や名誉、財産を得ていたならば、戦後六十年も経つてから私たちの前に出てきて慰安婦に関する話をすることもなかつただろう。

もつと言えば、この社会の差別構造の中に一生を随れられていたため、恨みや憤りの熾火を燃やし続けてこられたのかもしれない。

冬の白い寂寞とした空の下、Iさんが住む市営住宅の灰色の棟が連なつて見える。杖をつき、高血圧症で病院通いが欠かせないというIさんを自宅まで聞き取りに同行

した三名で送つていった。

この元兵士は、帰還後、故郷で釣具店を経営し、生計をたててきたという。同じ地区出身の「まさこさん」、「はるこさん」もまた、部落に戻つてゐた。

建てられてから何十年の歳月を経て、老廃したコンクリートの棟が立ち並ぶ団地の中を老人の手を引き、私はゆつくりと歩いていった。

戦後、結婚し、養子を迎えた「まさこさん」に一度だけ、Iさんは出会つたことがあるという。いつたい、いつ、どこで、どのような経緯で「まさこさん」と言葉交わしたのか、老人の記憶は曖昧だった。Iさんは、多分、今と変わらないような野太い声で、

「子どものできんような体にされて、金もろうたか」と頭ごなしに問い質したのではないだろう

か。それに対して、「まさこさん」は、「誰に言つても同じこと。子どもに知られたら生きておられん。子どものためにほつといてくれ」と答えたそうだ。

慰安婦とされた女性の多くが、生殖器を悪くして子どものできにくくなつてゐるこ

とは事実である。どうしても子どもが欲しい場合は、「まさこさん」のように養子を迎へたりしただろう。実子として手塩にかけて育てた子どもや家族の者に、まず自分の過去を知られたくないという思い、そして、何よりも養子であることを明かしたくないという二重の煩悶があったと想像できる。しかし、その時の彼女の苦渋の表情や内面の真実を誰も読み取ることなどできないだろう。

私もIさんの記憶の中で生きている、一面的にとらえられた彼女の肖像のごくわずかな片鱗しかここに留めおくことができない。

「まさこさん」は、K市内の総合病院で既に亡くなっていった。過去は、封印されたままであり、一人の女性の胸をかきむしられるような慟哭も怨嗟も白い虚空に葬られていった。

今は、ただ何も語らない暗い二つの眼窩が土の中に眠っている。

民族、国家、戦争、性、部落差別：あらゆる問題が交叉する断層に身を置いたため、彼女たちの被害は、捨て置かれた。

しかし、戦前の被差別部落の閉塞した空間の中で、苛酷な差別と貧困に曝され、充分な教育を受ける機会も与えられないまま幼くして日本軍の性奴隷とされた彼女たちと、当時、日本人としての権利を充分に享受し得た人々の責任とを同列に付してはならない。

彼女たちの存在を懊悩を、これ以上、黙殺してはならない。既に戦後、六十年近い月日が経過しようとしている。

この国の明るく糊塗された何気ない日常の光景の深部には、いまだに何一つ変わらぬ、分け入ることのできなかつた闇が、揺らぎなく横たわっている。

(前編の中で一部、事実関係に訂正があり、修正原稿は「戦後責任を問う関釜裁判を支援する会」ならびに「早よつくろう!」「慰安婦」問題解決法・ネットふくおか」のHPに掲載しております)

読んで見ませんか!

### 「怒りの方法」

辛淑玉著 岩波新書

(怒りを封じこめようとする日本社会のゆがみを指摘しながら、怒りを効果的に表現するスキルを伝授する…面白い!元気になる!)

(福山)「在日の「慰安婦」裁判に係わつてきて…」

講師 : 梁 澄子 (ヤン・チンジャ) さん

とき : 6月13日 (日) 14:~

ところ : 福山市市民参画センター・5F・会議室

(福山市本町1-35 TEL084-923-9005)

資料代 : 500円

主催 : 日本軍「慰安婦」問題を考える会・福山

(広島) 高橋哲哉講演会

「私たちの未来と戦後責任」

日時 : 7月11日 (日) 14:00~

場所 : 未定

## <傍聴をお願いします>

第2次不二越訴訟 第4回口頭弁論

日時：7月28日(水) 午後1時半から

場所：富山地方裁判所

来日される原告

成 S さんと羅 H さん

## <活動日誌 2004年3月~5月>

3月18日 岡崎議員・神本議員国会質問

3月21日 第131回関釜裁判を支援する会・定例会  
関釜裁判ニュース44号発送作業

4月2~5日

北陸弁護団訪韓聞き取り

4月19日 平尾、花房恵が日本人「慰安婦」の件で、  
聞き取りの事前調査

4月20日 平尾聞きとり調査

4月25日 第132回関釜裁判を支援する会・定例会

4月26日 立法ネット第3回会議

4月30日 花房2人、緒方釜山へ

5月1日 松岡、井上釜山へ  
原告たち(柳丁、H.S.U、姜Y.O、李Y.Oさん)と  
秋月君と合流

5月2日 バスで光州へ李金珠、梁錦徳、成 S さんと会う  
金珠さん宅に宿泊

5月3日 飛行機で光州から金浦空港  
朴頭理さんが入院している病院へ(井上帰国)  
春川の金景錫さんのお見舞い

5月4日 松岡帰国、朴S.O、金丁、羅Hさんと会う

5月5日 李順徳さん、朴頭理さんをお見舞い  
緒方はナヌムの家へ

6日花房帰国、7日緒方帰国

5月20~22日

日本の過去の清算を求める国際連帯協議会  
ソウル大会(緒方参加)

5月21日 福岡市人権啓発センターとの共同研究審査  
(平尾、花房恵)

5月23日 第133回関釜裁判を支援する・定例会

5月24日 中国人強制労働事件福岡訴訟控訴審判決

5月27日 サムソン交渉(ソウル) 原告たちを含め36人

5月30日 関釜裁判ニュース45号編集作業

5月31日 立法ネット第4回会議

メンタイ  
明大がつぶやく

★韓国訪問では色々な出来事がありました  
たが、下手な韓国語が通じずにはがっかり。  
タクシーの運転手に「インチョン」と言った  
のに「キムポ?」と聞き返さる始末。  
ちなみに発音が悪かったのか...?

★「韓国」や「在日」をテーマにした小説  
やエッセイを数多く書いた作家の  
隣芝萌さんが亡くなりました。愛  
読者だ、た、私は「自殺」という発表に  
今でも信じられない。思いで、遺作の  
小説を読んでいます。ご冥福をお祈り  
致します。(編集長)

関釜裁判を支える広島連絡会  
土井桂子

関釜裁判を支える福山連絡会  
市民運動交流センターふくやま

関釜裁判を支援する県北連絡会  
福政康夫

第二次不二越訴訟支援 北陸連絡会

ホームページ

<http://www.fitweb.or.jp/~sksr930>

関釜裁判ニュース 45号

2004年6月6日発行  
編集作業人 井上由美 阿部智子  
花房恵美子

発行

戦後責任を問う 関釜裁判を支援する会  
代表 松岡澄子 入江靖弘

E-mail hanafusa@df6.so-net.ne.jp

<http://www.h6.dion.ne.jp/~kanpu>

会費 3,000円

郵便振替 01740-0-47678

口座名 関釜裁判を支援する会

★WEB版関釜裁判を支援する会★

ホームページアドレス

<http://www.h6.dion.ne.jp/~kanpu>